

子どもの学習意欲を伸ばす指導方法の工夫

—導入教材と朝の会・学級通信の実践を通して—

教職実践基礎領域

小屋 聡子

I はじめに

私が小学校の教員を目指すことになったのには2つの理由がある。1つ目は、小学校1年生の時の担任の先生との出会いである。その先生は、いつも私の気持ちを察し、声を掛けたり、関わったりする先生だった。隣の席の子に、つねられていた時期があった。そのことを、私は自分で言い出せずにいたのだが、先生は、私が嫌な思いをしていることに気付き、助けてくれて嬉しかったことが今でも記憶に残っている。私にとって小学校は楽しい場所であり、将来恩師のような先生になりたいと思うようになった。2つ目は、保育士だった時に関わった卒園児との再会である。大学を卒業後、保育園で働き、保育士として乳幼児の保育に携わってきた。年長の担任をもつことが多く、卒園した子どもと関わる中で、生き生きと学校のことを話す子ども、その反面学校生活に馴染めず不安感をもつ子どもの姿があった。このような子どもの姿を目の前で見て、今度は保育士の経験を生かして、子どもたちの育ちを支えていきたいと、小学校教員になりたいという夢への思いが再び強くなっていった。

「教師は授業で勝負する」という言葉を耳にしたことがある。私は、保育士として小学生と年齢は違うけれど、多くの園児と関わりをもってきたことから、小学生と関わることに對しては、不安に思ったことはなかった。しかし、学校生活の大部分を占める授業においては、子どもにわかる授業ができるのだろうかと不安に思っていた。今の自分に欠けている授業力をつけたいという思いから、教職大学院に入学した。

2014年の秋からA市立B小学校で学校サポーターをさせていただくことになった。学校サポーターとして様々な年齢の子どもと関わる事ができた。サポーターで入った学級には、発達障がいの子もや、授業の内容の理解がゆっくりである子どもがいた。また、すぐに「わからないもん」と言い、学ぶ意欲がない子どももいた。このような子どもの授業の姿を観察していると、教師が授業で映像を使ったり、クイズなどの遊びを取り入れたりすることで、それまで下を向いていた顔があがり、興味を示し、授業に参加し始める姿があった。また、昨年度まで働いていた保育園の卒園児の中には、保育園で障がい児枠で受け入れている園児が、小学校入学後は、普通学級を希望する例も実際には少なくなかった。それらの園児たちでも、話をする際に、その内容を可視化し興味を引くことで、理解

が進み、集中して意欲的に話を聞く姿があった。意欲の有無で学びの姿勢や様々な活動への取り組みは、ずいぶん変わってくることをこれまでの保育士としての経験や、サポーターで関わってきた子どもたちの様子からも感じている。このような現状から、子どもがわかりやすく、楽しく参加できる授業をするために、教師は、学級にいる子ども全員が興味をもち、学ぶ意欲を伸ばすことができるような授業を展開していく必要があると考えるようになった。

教師力向上実習では、授業づくりの実践に加え、学級づくりの実践を行った。学級づくりの実践が、充実し、子どもと私の信頼関係ができてくるにつれて、授業での子どもとのやりとりが活発になったり、子どもの反応もよくなったりしてきたことを実感できた。このことから、子どもが意欲的に参加する授業をするためには、教師の授業の工夫はもちろんだが、学級づくりが大きく関わっていることがわかった。授業力だけを重視していた私の考えは、授業力の向上には、学級づくりの充実が土台になるという考えに変容した。

II 主題設定の理由

1. 有田和正に学んで

子どもの学習意欲を引き出す方法を、[有田 2004]は、イソップ童話の「北風と太陽」(図1)の話に例えている。

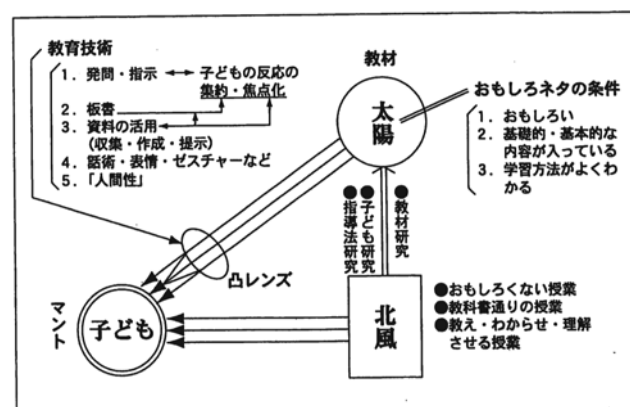


図1 北風と太陽

子どもも大人も、「勉強したくない」というマントをみんな着ている。教師は、このマントを脱がせようと一生懸命になる。しかし、教師が子どものマントを脱がせようとすればするほど、子どもはマントを着こみ消極的になってしまう。それは、教師が子どもに、「北風」を送っているためである。「北風」をいくら送っても、子どもはマントを脱がない。子どもがマント

を脱いで意欲を出すためには、「北風」をやめ、「太陽」のポカポカ光線を当てなければならない。ここでいう「北風」とは、おもしろくない授業、教科書通りの授業、教え・わからせ・理解させる授業を、これでもかこれでもかと休み時間もなしに教えることを指す。教師が子どもに向けて当てるものを「北風」から「太陽」に変えるためには、教材研究、子ども研究、指導法研究が必要である。「太陽」としての教材の条件として、①おもしろい②基礎的・基本的な内容が入っている③学習方法がよくわかる、の3点を挙げている。この「太陽」を子どもに当てれば、子どもはマントを脱ぎ捨て意欲を出してくる。私は、教師の指導方法や授業で扱う教材が、子どもの学習意欲に大きく関わってくる重要なものであることを学んだ。

2. 教材の役割と授業の導入

教職大学院で受けた授業「教材開発演習」では、生活の身近なものを教材として用いた社会の模擬授業を体験をした。興味を引きつけるための導入部分の工夫、思考をめぐらすための発問や展開、教材の工夫でこんなに楽しく学べるようになるのかと感銘を受けたことを、今でも覚えている。この模擬授業を受けた経験から、授業で扱う教材の開発に関心をもつようになった。

有田は「太陽」となる教材を授業で使うために、第1に、教材研究をして、教材をおもしろいものにすることを挙げ、「材料7分に腕3分」という言葉を用いて、子どもの実態にマッチしたよい材料（教材）があれば、授業は7割がた成功すると述べている。[有田2004]「授業」についても、教材を手段（時には目的にもなる）として、子どもの「学習意欲」を引き出し、「見えない（わからない）」内容を「見える（わかる）」ようにしながら、その過程で「学習技能」（勉強のしかた）を体得させていくといふことなみである、と述べている。[有田1997]

私は、これまでの保育士の経験から、感じていることがある。保育や幼児教育では、子どもの心を揺さぶる環境づくり、遊びたくなるような室内環境づくりなど、環境整備を重視する。週の指導計画には環境構成の欄があり、環境づくりを重視していることがよくわかる。私自身も保育をする際には子どもの実態や季節などに応じた環境づくりを大切に、子どもが遊ぶ姿に変容があれば、さらに遊びが発展していくように、環境の再構成を行ってきた。サポーター活動で国語の授業実践をした際に、学校の授業で扱われる教材というのは、幼児教育という環境に当たるものであり、子どもの実態に合った教材であれば、子どもの学習意欲を引き出していけるのではないかと考えた。同時に、45分の授業の最後まで、子どもの学習意欲や授業の集中が継続するかどうかは、子どもの学習の取り組みが、授業の初めの部分において、いかに子どもの興味を引きつけるかで大きく変わってくると感じ、授業の導入

部分の重要性を実感した。

以上のことから、教材の工夫が子どもの学習意欲や授業の活性化に不可欠なものであると捉えた。それに加えて、子どもの意欲を高め、学びを広げていくためには、よい材料を見抜く目や、それを鋭く料理してよい教材に仕上げる腕が、教師に必要な力であると捉えた。そこで、私はつかむ、広げる、深める、まとめるという授業展開の中で、特に『つかむ』の部分で子どもの興味を引き出せるような導入教材の工夫をしていきたいと考えた。また、導入教材を作る際には保育士の経験や工作など作ることが好きであるという自分の特技を生かして教材開発をしていきたいと考えた。

3. 学級づくり

有田は、「太陽と北風」の中で、子どもに当てる「太陽」の光を強めるためには、次の5つの「教育技術」が必要だと述べている。①発問・指示②板書の活用③資料の活用④話術・表情・ジェスチャーなど、もろもろの技術⑤教師の人間性である。そして、①～④の技術と教師の人間性のバランス（図2）がとれている時、授業という「車」はまっすぐ進む。しかし、人間性はいいけど技術が不足している時や、その反対の時は、車は同じ所をぐるぐる回ることになる。教師は、教育技術を磨くと同時に人間性を高める努力もしなければならないと述べている。[有田2004] 有田の指摘する教師の人間性は、教師と子どもの日常的な対話による子ども理解や子どもの実態把握、授業での子どもの発言との対話を通して、子どもの学習をより高度なものに高め、抽象的な思考力を育てる教師の役割である。教師の力量は、子どもと教師の対話的な関係による授業の進行によって、子どもと教師の協同による授業づくりを進める教師の「対話性」であると考えられている。[中妻2005]

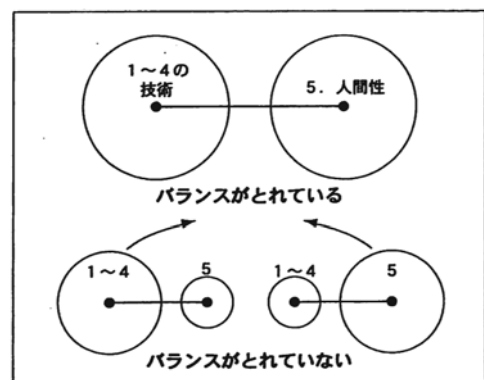


図2 技術と人間性のバランス

私は、この「教育技術」のなかで⑤の教師の人間性に着目した。保育・幼児教育で重視している環境には、大きく2つに分けて、物的環境と人的環境がある。乳幼児の場合、周囲にいる大人や子どもの模倣をしながら、自分のものへと体得していくことが多い。人的環境に大きな影響を受ける。学校で子どもに関わる人的環境は、教師以外にも、同じ学校の仲間や地域の人な

どがいるが、私は「教育技術」の中に教師の人間性が入っていることから、子どもと教師の関係が大切であり、教育技術の①～④の技術と⑤の人間性のバランスをとるために、教師が子どもに自分の人間性をどう開示させていくかの工夫をしていく必要があると考えた。そして、教師が子どもに自己開示する際には、子どもとの関わり、関わる際の対話が不可欠で、教師からの子どもへの関わりが、教師と子どものつながりを強くしていくと考えた。

そこで、私は、個別の関わりとは別に、教師から学級の子ども全員への直接的な関わりと間接的な関わりの中で子どもと対話する機会を意図的にもつために、朝の会と学級通信の学級づくりの実践をして、人間性の開示を図ることにした。朝の会では、子どもと対話して関わりをもてるような活動を工夫した目覚ましタイムの実践を行うことにした。子どもと直接的な関わりを通して、登校後、頭がスッキリした状態で、授業に臨めるように、集中力や学習する姿勢を整えることを意図した。学級通信では、私が書いた通信を子どもが読むという間接的な関わりから、対話のきっかけをつくるために、子どもに向けて書き、教室に掲示することにした。通信の内容は、学校生活での子どものよい姿の紹介や子どもと共に考えたいことなどにした。私は、朝の会と学級通信の学級づくりの実践を継続して行いながら、子どもとの対話や関わりを土台として自己開示を図り、子どもと距離を縮め、つながりを強くしていこうと考えた。

4. 子どもの実態

① 教師力向上実習Ⅰ

A市立B小学校2年2組男子15名女子14名/計29名

子どもは、全体的に明るく元気で、親和的である。生活面では、自分のことは自分でできる子どもが多く、自信をもって行っている。学習面では、わからない時に自分一人で考えることなく、諦める姿があるが、隣や近くの席の友だちと相談しながら協力して考えることはできる。子どもの学習意欲を引き出し、自力解決の場面においても、意欲的に考えられるようにする必要があると考える。

② 教師力向上実習Ⅱ

A市立B小学校3年2組男子18名女子15名/計33名

本学級の子どもは、興味のあることに対しては、意欲的に取り組み、授業中の自力解決の場面においても既習事項を用いて、自分の考えを表現しようとする姿が多くみられた。その一方で、教師の話聞く場面においては、集中力が持続せず、最後まで話を集中して聞く子どもは限られている。話をする時には、具体物など可視化した教材を用いることで、子どもの集中力の継続を図れると考えた。

③ 教師力向上実習Ⅲ

C市立D小学校4年2組男子21名女子20名/計41名

本学級では、学級目標に「人の気持ちを考えて行動し、えがおいっぱい、元気のあるクラス」を掲げている。学級では、学級の仲間に向けてメッセージを書く「学級カレンダー」や、学級の仲間に向けての伝言を教室の背面黒板に掲示する「みんなの伝言板」の取り組みを行って自発的、意欲的な姿がある。学級は全体的に子どもらしい素直で明るい雰囲気があり、開発した教材に対して、素直な反応が期待できた。

Ⅲ 導入教材の工夫を行った授業づくりの実践

1. 導入教材活用の実践

つかむ、広げる、深める、まとめるという授業展開の中で、特に『つかむ』の部分で子どもの興味を引きつけられるように、視覚に訴える教材をつくり、導入で教材を活用する。教師力実習Ⅰ～Ⅲを通して、担当する学級はそれぞれ異なるが、様々な教科の授業実践で、導入教材の工夫をした。子どもが教材と出会い、「この授業おもしろそうだな。」「早く勉強したいな。」と思うような教材にするためにはどのような工夫が必要であるかを考えて、導入教材を作成した。

(1) 絵や写真の活用

子どもの視覚に訴えるものとして、絵や写真を導入教材として活用する。絵や写真を集中して見たり、細かいところにも子どもの注意が向くようにしたりするために、全体から細部へと焦点化した提示や、2つのものを比較させる提示方法をとる。また、教材として準備する写真は、1時間の授業の学習のめあてに関連させて、子どもの生活や地域、学校生活の中にある身近なもの、教科書にある絵や写真も活用できるようなものにした。絵や写真の細部にも目を向ける必要があるものについては、書画カメラを使用し、テレビ画面に映すことで子どもが見やすいようにした。

① 道徳「気持ちのよいあいさつ」(2学年)

「心のとびらがひらくようなあいさつ」とは、なんだろう。

写真(資料1)を、書画カメラを用いて提示する。見慣れた風景のため、校門の写真ということがすぐに子どもはわかっていた。次に「校門の横にこんな立て看板があります。」と次の写真(資料2)を提示した。『あいさつは心のとびらを開くかぎ』という標語の心を空欄にして、子どもにどんな言葉が入るか予想させる。毎日見ているようですぐには出てこなかったが、子どものいろいろな発想を引き出すことができ、本時の学習課題につなげ、その後の授業を展開した。



〔資料1 B小学校校門の写真〕 〔資料2 あいさつの標語〕

② 算数「三角形」第1時（第3学年）

いろいろな三角形を作って、なかま分けしよう。

三角形の単元の第1時であり、単元の導入にあたる時間であったため、私は既習事項である「三角形」という言葉を子どもから引き出し、これから三角形の学習をするということをつかませたいという思いをもっていた。算数の教科書には東京スカイツリーの写真とともに、三角形で作られている塔が掲載してあった。ここから、私は「子どもの生活圏である名古屋テレビ塔はどうか？」という疑問をもち調べると、三角形の形が隠れていたもので、教材化した。しかし、「何の形が隠れていますか？」と発問した際に、三角形ということが、テレビ塔では子どもはわかりづらいと予想した。そのため日本全国にある塔の中で、三角形の形でできていることが、見てすぐわかるものを探し、茨城県にある水戸芸術館の塔にたどり着いた。資料3、資料4の順に提示し、対話を通して、それぞれの塔が三角形できていることを子どもに見つけさせ、三角形の部分は、子どもに前にでてきてもらい、チョークで囲むように声を掛けた。生活圏にあるものから三角形を意識できるようにして、単元の導入とした。



〔資料3 水戸芸術館の塔〕



〔資料4 名古屋テレビ塔〕

③ 社会「地域のはってんにつくした人々」第1時（第4学年）

宝暦治水はどんなものだったのだから？

木曾三川の絵図（資料5、資料6）を同時に提示して、川の様子の違いについて、絵図の比較から子どもに自由に発言するように伝えた。その後、木曾三川に変化があるのはなぜか？という発問をし、子どもからの発言を聞く。その後、実は治水工事があって絵図のように川の形が変わったことを話し、学習のめあてを提示して、宝暦治水はどんな治水工事であったのかを学ぶ授業展開につなげた。



〔資料5 木曾三川流域大絵図（宝暦治水以前）〕



〔資料6 木曾三川大絵図（宝暦治水以後）〕

④ 社会「地域のはってんにつくした人々」第2時（第4学年）

治水工事には、どんな苦勞があったのだから？

第1時で、宝暦治水がどんな工事であるかの概要を学習した。本時の導入で前時の復習をクイズ形式で行った。地域の発展に尽くした人として前時に出てきた平田靱負の名前はしっかり復習しておきたいという思いから、平田靱負のクイズの際に印象が残るように写真の提示を工夫した。資料7～9の写真を提示し、「宝暦治水に関係のある人は誰でしょう。」と発問した。平田靱負の名前とともに、写真の人物の名前も確認した。資料8は子どもがおもしろいと思い興味が引きつけられるように、資料9は平田靱負と同じ鹿児島薩摩藩の出身であるという理由で写真を教材として扱った。



〔資料7 平田靱負像〕

〔資料8 くだおれ太郎〕

〔資料9 西郷隆盛像〕

（2）手づくり教材の活用

子どもの実態や興味に合わせ工夫ができる点や、教師が子どものために教材を手づくりすることで、教師の子どもへの教育的愛情を示すことができる点が、手づくり教材の利点だと考える。説明しがちな内容の部分を紙芝居にすることや、子どもが学習内容や学習のめあてを楽しく把握し、つかめるような仕掛けを工夫して教材づくりを行った。

① ペープサート・紙芝居

道徳「あやまることのむずかしさ」（第2学年）

「ゆうきを出す」ってなんだらう。

明るい心の資料の紙芝居（資料10）を作成した。紙芝居を始める前に、主人公の「ぼく」のペープサート（資料11）を出し紹介して、どんな話であるかということに興味をもたせ、集中して聞く姿勢をつくった。その後、子どもに紙芝居の読み聞かせを行った。



〔資料10 紙芝居〕

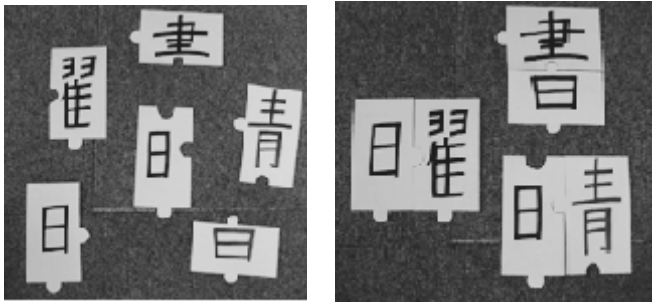
〔資料11 ペープサート〕

② 漢字パズル

国語「同じぶぶんをもつかん字」（第2学年）

同じぶぶんのあるかん字を見つけよう。

漢字は部分と部分が合体してできているということを通して、楽しくつかめるようにという思いで、既習事項の漢字で漢字パズル（資料 12）を作った。「昨日の夜先生、家でパズルをして、完成したから、みんなに見せようと思ってパズルをもってきたよ。でも、学校に着いて見たらバラバラになっていて、困っちゃったんだよね。」という言葉から導入を始める。黒板にバラバラになった漢字パズルをはった。子どもに前に出て、漢字パズルを 1 つずつ完成させてもらい、学習のめあてにつなげた。



[資料 12 漢字パズル]

③ はてなボックス

算数「三角形」第 2 時（第 3 学年）

じょうぎとコンパスを使って、二等辺三角形を書こう。



[資料 13 はてなボックス]

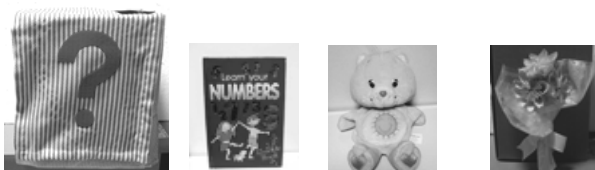
前時で学習した二等辺三角形と正三角形の復習した。それぞれの三角形の定義を、本時の作図につなげるために、はてなボックス（資料 13）から、同じ長さの辺を同じ色にしてある三角形のカードを出す。子どもに三角形の種類を、声に出して言うように指示した。

④ はてなボックススペシャルバージョン

国語「修飾語」第 2 時（第 3 学年）

修飾語が、どの言葉をくわしくしているか考えよう。

はてなボックスの大きさを大きくして、箱に仕掛けをつくりはてなボックススペシャルバージョンとした。はてなボックススペシャルバージョン（資料 14）から本、ぬいぐるみ、花束を順に出し、それぞれについて、子どもに前時で学習した修飾語を使って、詳しく話すように伝える。前時で習得したことを、本時の導入部分で活用させることで、修飾語は文をわかりやすく、詳しくする言葉であることの復習を行った。はてなボックスから物を提示することで、何が出てくるのだろうかという期待感や、ボックスから出てきたものをよく見ようとするにつなげた。



[資料 14 はてなボックススペシャルバージョン]

⑤ 世界の歌旅行のしおり

音楽「世界の歌めぐり」第 1 時（第 3 学年）

世界の歌旅行をして、いろいろな国の曲のちがいをかんじよう。

世界の歌の鑑賞を行い、様々な国の曲想の違いを感じて楽しむことが単元のねらいの 1 つであった。そこで、第 1 時の単元の導入教材として、鑑賞した曲の国を色塗りして、旅行した気分になれるように世界の歌旅行のしおりと、白地図（資料 15）を用意した。学校の遠足などにはしおりがあり、子どもにとってしおりは、身近なものであるということに目を付け、鑑賞を意欲的にできるようにすることをねらって教材として作成した。また、しおりは単元を通して、使えるようにした。

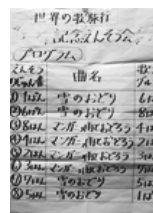


[資料 15 歌旅行のしおりと白地図]

⑥ 世界の歌旅行演奏会プログラム

音楽「世界の歌めぐり」第 8 時（第 3 学年）

グループ演奏会をして、みんなで聴き合おう。



[資料 16 演奏会プログラム]

「雪のおどり」と「マンガニ、雨とおどろう」のいずれかの曲の楽器演奏を単元のまとめとして、発表し、鑑賞し合い、単元のまとめを本時で行った。前時に発表順をくじで決めていたので、発表を「歌旅行記念演奏会」として、プログラムを作成して、授業の冒頭に板書に掲示した。プログラム（資料 16）を用意することで、自分のグループ発表の順がわかり見通しがもてるようにした。また、楽しい雰囲気をつくり発表への期待感ももてるようにという意図で単に発表会とするのではなく、歌旅行記念演奏会という名前のプログラムを教材として作成した。

(3) パネルシアターの活用







パネルシアターには、子どもを夢中にする力がある。子どもの認識は、豊かな感性と感情に支えられ、驚きと発見から知覚、表象、概念形成へと進む。子どもたちは、パネルシアターのお話の世界に没入することによって知性や感性が活性化し、わかる喜びを味わう。パネルシアターは、簡単に作ったり、動かしたりすることができるので、子どもが授業に参加し楽しい学びである教室が実現すると言われている。[行田 2014] パネルシアターは保育や幼児教育の現場でよく使われているものである。私も保育の中で園児にお話をする際によく行っていた。自分の経験を授業に生かすとも

に、導入教材として、学習のめあてにつながるパネルシアターのお話を作成すれば教材として子どもの学習意欲を引き出す効果があると考え、実践した。作成の際には、授業内容がイメージでき、授業のめあてが子どもにつかみやすくなるように、ストーリーをつくり、実演していった。実演の際には、子どもとの対話を大切にしていた。以下にストーリーと対話の一部を紹介する。(T:教師、C:子ども)

① 学活「むし歯はこわい」(第2学年)

むし歯はこわい?こわくない

パネルシアター「344 はなんの数字?」


	T: この数字は何の数字でしょう? C: 電話番号 T: 電話番号、違うな C: 先生の車の番号 T: 先生の車の番号はもう少し長いよ
	T: これでわかるかな? (344の数字に歯の枠をつける) C: 歯だ! C: むし歯になった人 C: 歯が生え変わった人
	T: ヒントだすね C: ヒント、いらん、いらん T: ヒント1、笑顔がすてきです (女の子をはる) C: 歯が健康な人
	T: じゃあ、ヒント2ね C: ヒントいらない C: いる いる T: ヒント2、毎日これを使います (歯ブラシをはる) C: 歯を磨いていて笑顔の人
	T: ヒント3、歯がピカピカです (男の子をはる) C: 歯がきれいな人 T: 歯がきれいな人ってどんな人? C: むし歯がない人だ
	T: 正解! B小学校で、むし歯ゼロの人の人数です 学校には全員で380人の子どもがいるから、344人もむし歯がないなんて、すごいね



むし歯の子は学級の中にもほとんどいないのが現状である。むし歯の怖さを学習し、これからも歯を大切にしようとする気持ちを育て行動できるようにめあてにつなげた。

② 算数「1000までの数」第1時(第2学年)

たくさんの星を工夫して数えよう。

パネルシアター「星はいくつ?」

	T: 7月7日はなんの日でしょう? C: 七夕 (織姫、彦星をはる) T: 7月7日は七夕だね
---	--

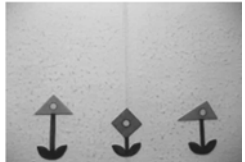

	T: ♪笹の葉さ～らさら～ (歌いながら星をはる) 星はいくつあるでしょう? C: 1、2、3… T: どうすると数えやすいかな? C: 2ずつ数える C: 10のまとまりにする
	T: 10のまとまりをつくと、10が1つと、3つで、星は全部で13個だね

たくさんの数を数える時は、10のまとまりをつくと速く正確に数えられることを、パネルシアターの導入でおさえた。教科書の挿絵のたくさんの星も10のまとまりをつかって数えると数えやすいことに気付けるようにした。

③ 算数「三角形」第4時(第3学年)

三角じょうぎのかどの形をしらべよう。

パネルシアター「はなとり」




	T: 花が咲いていました C: 三角の花だね
	T: そこに、鳥がとんできました とりのくちばしの先と同じ形をもつ花はどれでしょう? C: ピンクの花 C: オレンジの花 T: どうすると形が同じかわかるかな? C: 鳥と花を合わせる

合わせることでかどの形が比較できることを、パネルシアターでの対話の中で子どもから引き出した。本時のめあてである三角定規のかどの形を調べる時も、合わせると調べることができることの気付きにつなげていけるようにした。

④ 国語「修飾語」第1時(第3学年)

分かりやすい文にするにはどうしたらいいのか考えよう。

パネルシアター「書いたものはな～に?」

	T: さつきさんが台所にいました。そこへお母さんがきました。 (お母さんをはる)
	T: 「さっちゃん、何してたの?」とお母さんが聞くと、さっちゃんは…
	T: 「私は、書きました。」と答えました。



?

T: さつきさんは、何を書いていたの
でしょう？(手紙2種類、はがき、
絵のパネルをはる)
C: えーわからない

T: 何がわかると、さつきさんの書いて
いたものがわかるかな？
C: 何を書いたかわかるかいいいな
T: みんなで聞いてみましょう
「さつきさんは、何を書きまし
たか？」

T: 「私は手紙を書きました」
(はがきと絵のパネルをとる)
C: 絵とはがきじゃないね
C: どちらの手紙かは、まだわからない
ね
T: 何がわかると、どちらの手紙を書い
ていたかわかるかな？
C: 誰に書いたかわかるかいいいな
T: 「さつきさんは、誰に手紙を書きまし
たか？」

T: 「私はおじいちゃんに手紙を書きまし
た」(おばあちゃん宛に書いた手紙の
パネルをとる)
C: どちらかわかったね

T: さつきさんが書いたものがわかった
ね 今日文をわかりやすくする言
葉の勉強をします

言葉を加えることで、詳しくわかりやすい文章になることを、パネルシアターの話で実感させて、修飾語の学習につなげた。

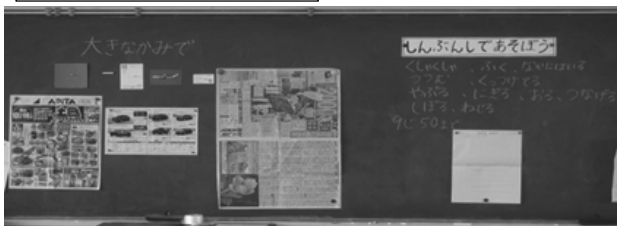
(4) 生活にある身近なものの活用

子どもの生活にある身近なものを教材として取り扱うことで、子どもはイメージをもちやすく、学習内容を身近なものとして捉えやすくなる。学校での学びが生活に生きていくようにという思いから、授業の内容に関連させて、生活にある身近なものの教材化を試みた。どの子どもも知っているものを教材にして、実践を行った。

① 生活の中にある様々な紙

図工「大きなかみで」(第2学年)

しんぶんしてあそぼう。



[資料17 板書]

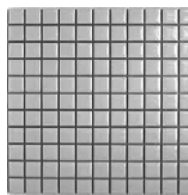
生活のなかにある紙(色紙、はがき、絵はがき、広告大・小、付箋、新聞紙)を子どもとやりとりをしながら黒板に提示した(資料17)。その中で、新聞紙が

生活の中にある大きい紙であることに気付かせ、本時の学習のめあてにつなげた。

② タイル

算数「三角形」第6時(第3学年)

しきつめたもようから、いろいろな形をみつけよう。



[資料18 タイル]

本時の目標は、三角形を敷き詰め算数的活動を通して、模様をつくることや二等辺三角形や正三角形の定義や性質の理解を深めることであつた。導入部分で敷き詰めるということは、隙間なく並べることであり、敷き詰めることに子どもの興味がわくようにしたいと考えた。そこで、生活の中で形を敷き詰めてできたものはないかと意識して生活していたところ、実習中の掃除の時間にトイレの壁のタイルが四角形の敷き詰めであることに気がついた。そこで、タイルの写真(資料18)を教材化した。

(5) 遊びの活用

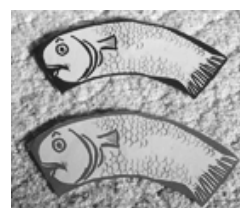
手品や手遊びなど、遊びの要素があるものを授業の導入で活用した。子どもの視覚に訴え、おもしろさを味わわせることで学習の意欲につなげられるように導入で手品をした。手遊びは、遊び方に変化をもたせ、楽しさが増すようにしていきながら、子ども同士の関わりも大切にしたい。

① 鯉のぼりの手品

算数「三角形」第5時(第3学年)

三角形の角の大きさについて調べよう。

本時では、三角形の角の大きさを重ね合わせることで調べる。大きさを比べるためには重ね合わせればよい



[資料19 鯉のぼりの手品]

ということを、子どもから引き出すために、目の錯覚で大きさが違うように見える鯉のぼりの手品(資料19)を導入で行った。2つの鯉のぼりの大きさは違うと思うか、同じであると思うか、対話を通して子どもに聞いた。大きさは同じなのに大きさが違うように見える不思議さから興味をもてるようにした。

② 手遊び「十五夜さんのもちつき」の発展

音楽「世界の歌めぐり」第2時(第3学年)

外国の手遊びを知り、手遊びの方法を工夫しよう。



[資料20 手遊びの様子]

前時で、日本の手遊び「十五夜さんのもちつき」をペアで行った(資料20)。前時の授業後、休み時間に子ども同士が手遊びをしている姿をよく見かけ、その姿を観察していると、指先だけで行い、自分たちで考えて手遊びに変化をつけて遊んでいる

ことがわかった。本時では世界の手遊びを学習するが、楽しい雰囲気の中で授業が始められるように、導入で休み時間に遊んでいた子どもの発想をヒントに、前時で行った手遊びを発展させて、ペアで行った。

2. 成果と課題

1 時間ごとの授業の導入で、それぞれ形は違うが、様々な教材を作成し、実践で子どもの反応やその時の様子を観察した。成果として次の三点が挙げられる。第一に、導入教材を工夫して活用することは、子どもの興味を惹き、集中力を高める効果があるということである。どの教材においても、教材を提示して話を始めると、それまで下を向いていた子どもも顔があがり、教材に注目して話を聞く姿があった。また、集中がきれて教室がざわざわし始めた時でも、紙芝居を始めると、吸い込まれるように紙芝居を見て、静かになった。このことは、授業中の子どもの姿や、子どもの顔が前を向いていること（資料 21）、授業の映像を振り返った際にもよくわかった。導入後の授業展開においても挙手する子どもが多く積極的に授業に参加する子どもの姿（資料 22）や授業の感想に、学んだ内容の面白さや次時への期待を書いている子どももいて（資料 23）、導入教材の活用が学習意欲につながっていると捉えることができた。

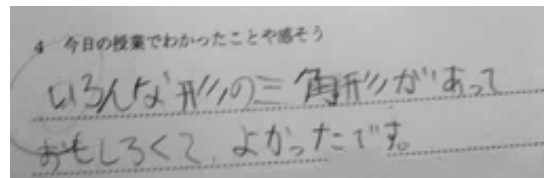
導入教材の活用をした授業を積み重ねていくことで、授業の前には、「先生、今日は何やるの?」「この前のおもしろかったから、またやって」などと、子どもから私に声を掛けることがあった。授業に期待感をもち、楽しみにしていることが言葉や表情からわかり、学習意欲が湧いていることが伝わってきた。教材を子どもが興味をもってみるという点で、子どもが見て見やすい・わかりやすいということが教材の必須条件になることが確認できた。



【資料 21 紙芝居時の子どもの様子】



【資料 22 子どもが挙手する姿】



【資料 23 授業の感想】

- T: この前の日曜日に名古屋に行って、こんな写真を撮ってきました。(テレビ塔の写真をみせる。)
- C: 名古屋に行ってきたの?
- C: 見たことある。
- C: テレビ塔だ。
- T: そうです。テレビ塔です。この写真をアルバムにしまおうとしたら、こんな写真も見つけました。(水戸芸術館の写真を見せる。)
- C: 何それ?
- C: どこ どこ どこ?
- C: これ名古屋?
- C: 新聞で見たことある。
- T: これは茨城県の・・・
- C: えーそどこ?
- C: そんな遠いところまで行ってきたの?
- T: 茨城県にある水戸芸術館というところにある塔だよ。
- C: 先生そんな遠いところまで行ってきたの? しかも、朝。
- T: 先生は、この2つの塔の写真を見て、こんなことに気がつきました。「あ!この2つの塔は○○○でできている。」
- C: 段ボールでできている。
- C: 違うよ。
- C: 金属!
- T: 注目ポイントは形です。
- C: 三角形。
- T: そうです。三角形です。こっち(水戸芸術館の塔)はわかりやすいよね。(書画カメラに写し、チョークで三角形の部分の輪郭を書く。)
- C: いいの? 書きちゃって?
- C: あーあ、書きちゃった。
- T: 写真はまた、プリントすれば、大丈夫。じゃあ、テレビ塔はどこが三角形だと思いますか?(指名し、前で三角形の部分を目指すように指示する。)
- C: ちっちゃい。
- T: 大きくしてみるね。(書画カメラで拡大する。)
- C: 本当だ。
- C: 先生、まだたくさん三角形あるね。

【資料 24 発話記録】 T: 教師 C: 子ども

第二に、導入教材を介して、教師と子どもの対話が広がり、教材は子どもが思考をめぐらすきっかけになるということである。このことは名古屋テレビ塔と水戸芸術館の塔の写真を導入教材とした算数「三角形」第1時、第3学年の10月に行った授業の導入部分5分間の教師と子どもの発話記録(資料 24)からわかる。写真の導入教材を介して教師と子どもの対話が成立している。そして、対話の中で子どもの発言の回数が多い。子どもの発言が活発になっているのは、学習への意欲の表れだと捉えた。発話記録の下線部分の子どもの発言から、子どもは写真を見て、1日のうちのどの時間に教師がその場所に行き写真を撮ったのかというところまで、想像していることがわかる。これは、写真という教材を通して、子どもが様々なことを考えて

いるからこそその発言であると言える。

第三に、教材として扱うものは、子どもの生活の中にある身近なものにするとよいということである。私は、子どもの生活を学習内容につなげると、興味やイメージがもてるため、学ぶ意欲にも直結することを授業の子どもの反応から実感することができた。

課題としては、導入教材を考え作成する際に、子どもにも興味をもたせることに重点を置きすぎ、学習とのつながりを意識していなかったことが挙げられる。導入教材で子どもの興味を惹きつけても、その後の学習にその興味がつながっていかなければ、意味がない。つかむ・広げる・深める・まとめるの授業展開の中で、つながりをもたせ 45 分の授業で集中が継続し、学びが深まっていくようにしなければならない。導入教材を考える際には、授業の一番大切なところへ、いかに子どもの興味をもたせることができるかという視点が重要であることがわかった。その際には、既習事項や基礎基本を踏まえる必要があることも授業実践で感じた。

以上のように、導入教材の工夫の実践を通して、導入教材は子どもの学習意欲に大きく関わることがわかった。同時に、導入教材作成にあたって、意識すべき視点を三点挙げ、成果と課題のまとめとする。

＜導入教材作成の視点＞

- ① 子どもが見やすい・わかりやすい視点
- ② 生活の中にある身近なものを教材にする視点
- ③ 授業の一番大切な部分に興味を引く視点

IV 教師と子どもをつなぐ学級づくりの実践

1. 朝の会「目覚ましタイム」の実践

(1) 実践した学級

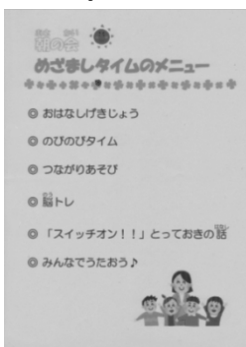
A市立B小学校2年2組男子15名女子14名/計29名

(2) 「目覚ましタイム」のねらい

- ・登校後、頭がスッキリした状態で、授業に臨めるように、集中力や学習する姿勢を整えられるようにする。
- ・目覚ましタイムを通して、教師から学級全体の子どもへ直接的な関わりをもち、対話をする。

(3) 実践内容

教師力向上実習Ⅰの4週間の期間、朝の会の5分程度の時間を活用して「目覚ましタイム」の実践を行った。日替わりメニュー（資料25）を提示して、活動していった。



【資料25 目覚ましタイムメニュー】

おはなし劇場
絵本の読み聞かせ
のびのびタイム
体操「げんきつき体操」
つながりあそび
ペアで行う遊び
「自動車ブーブー」など
脳トレ
漢字クイズなど
とっておきの話
学級通信の話
みんなであうおう♪
歌「えがおがかきなれば」

最終日に、6つのメニューの人気投票を行うと、のびのびタイムが一番人気であった。朝、体を動かす活動を行うことに子どもは抵抗がないことがわかった。

2. 学級通信の実践

(1) 通信のねらい

- ・学校生活の中での子どもの様子、学級内で考えたいこと、授業で学習した内容に関連したことなどを載せ、学校生活の振り返りができるようにする。
- ・学級通信で子どもへ様々なことを教師から発信し、子どもとの間接的な関わりをもつことで、対話のきっかけをつくる。

(2) 実践の内容

サポーター活動、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと継続して担当学級で学級通信を1週間に1回程度発行して、学級に掲示をした（資料26）。掲示をする際には、季節感が感じられるように季節の飾りをつけたり、通信の内容に関係する写真などを一緒に掲示したりなど、子どもが掲示した通信を読みたくなるような工夫をした。また、通信を掲示した日には、担当教員に朝の会に少し時間をもらい、通信の内容について子どもに向けて、話をする時間をもった。通信の名前は、学級の子どもの様子や子どもへの思い、学級目標などを踏まえてそれぞれつけていった。

- ・2015年4月～7月実施 A市立B小学校2年2組学級通信「スイッチオン!!」No.1～16
- ・2015年9月～10月実施 A市立B小学校3年2組学級通信「サンサン!!」No.1～7
- ・2015年11月上旬実施 C市立D小学校4年2組学級通信「花さき山」No.1～4
- ・2015年11月中旬～12月A市立B小学校1年2組学級通信「きらきら」No.1～5



【資料26 学級通信教室掲示の様子】

3. 成果と課題

(1) 朝の会「目覚ましタイム」の実践

＜成果＞

毎日日替わりで、予告なく6つのメニューを行っていくことで、朝会うと「今日の目覚ましタイム何やるの?」「今日は、のびのびタイムがいいな。」など私に聞いたり、子ども同士で話したりしていた。何を行うかを楽しみにするようになってきていることを、子どもの姿から感じ取ることができ、目覚ましタイムが対話のきっかけになっていた。また、目覚ましタイムの活動でも、子どもの実態に合わせて内容決定するものと、子どもの姿を踏まえた上での私の思いで内容決定

するものがあつたが、私自身の思いを反映させることが、教師の自己開示となり、子どもとのつながりを強くした。このことが休み時間での関わりや授業実践での子どもとのやりとりの活性化や反応のよさに反映され、子どもとの関わりを深める効果があつたと捉えた。

<課題>

日替わりメニューにすることで、目覚ましタイムを子どもは楽しみにして、意欲的に活動に参加する姿があつた。しかし、一つひとつの活動に関連性がなかつたので、つながりのない活動になってしまった。活動に関連性をもたせることで、積み重ねによる力の向上が図れたと考える。

(2) 学級通信の実践

<成果>

掲示を始めた頃は読む子どもはほとんどいなかったが、掲示の継続と朝の会での通信の話、通信と共に写真などを掲示すると、興味をもって読む子どもが増えた。子どもが読みたいと思うような内容や掲示の工夫が、子どもが通信の掲示を自分から読むようになったことにつながつたと考える。通信を読むことで、通信の内容を話題にした対話が子ども同士、私と子どもの間で増えていき、つながりを強くしたと感じた。

また、学級通信を書くためには、学級の子どもの姿をしっかりとらえていないと書くことはできない。実践を継続するにつれて、通信に書く内容について、以前ほど悩まなくなり、時間もかからなくなった。これは、通信を書くことで子どもの姿をしっかりと捉えようとする意識が高まり、子ども理解の目が以前に比べて養われたからだと考える。子ども理解が進むことで、より子どもの実態を踏まえて教材作成や活動内容を考えることができるようになった。学級づくりの実践が授業実践に生かすことができた。

<課題>

今回サポーター活動と実習を通じて、学級通信掲示の実践を1~4年で行つた。2~4年の実践中には気付かなかつたが、1年生で実践したことで、どの子も読みたくなる通信にするためには学年に応じた文字量やイラストの添付が子ども向けに出す通信を書く場合には必要であることがわかつた。また、学年が低くなるほど、教師が学級通信で伝えたい意図や思いが子どもに伝わりづらく、子どもに伝わるわかりやすい書き方が必要になってくることがわかつた。

V 教職大学院での学びを生かして

大学院での理論と実践の学びを通して、私は子どもにわかりやすく楽しい授業をするためには、教師の教材の工夫や板書の工夫、子ども同士が関わり合う学習形態の工夫など、子どもの実態に応じた工夫が不可欠であることとその手法を学んだ。私は、特に「導入の手づくり教材」に力を入れて、授業づくりを行つてきた。これからも、子どもが「おもしろそうだ」という

関心・意欲がもてる教材を提示できるように教材開発を継続して行つていく。

大学院での学修を通して、授業をすることに抵抗を感じなくなったと同時に、自分の授業の先にある子どもの笑顔を思うと教材研究に意欲的に取り組むことができるようになった。授業実践を重ねていくと、授業を充実したものにするためには、授業力だけではなく、その土台に学級づくりの充実があることに気が付いた。その気付きは、授業づくりのみを重要であると考えていた大学院入学当時の自分の考えを大きく変えた。しかし、「授業で勝負できる教師になりたい。」という思いは今も変わらない。小学校の教師になるという目標の実現を4月から果たす今、私の次の目標は、「小屋先生の授業は楽しくてわかりやすいよね。」と子どもに思われるような授業名人になることである。これまでの授業実践で行つてきた教材づくりは今後も続けていき、子どもに学ぶ意欲を伸ばすよい教材が提示できるように、教材開発に力を注いでいきたい。そして、授業づくりの充実とともに学級づくりの充実も図り、教師と子ども、子どもと子どもの関係を大切に築いていける教師でありたいと思っている。

教師になってからも、私は学び続ける姿勢をずっと大切にしていきたい。大学院に入学して、新しい知識の獲得や実践を通じた実感からたくさんのことを学んだ。そこから、自分の視野も広がり、考え方の変容もあつた。これまでの保育士としての経験からも、現状に満足することなく、新しいことに挑戦していくことで、今をよりよくできることを感じてきた。今後も、今の自分の力がさらに向上できるように、目の前の子どものよりよい成長を育めるようにする。

保育士として、教職大学院の学生としてこれまで多くの子どもや様々な先生方と関わつてきた。今の自分があるのは、それらの人たちとの関わりがあつたからだと考えている。今後も、子どもや私の周りにいる人、新しく出会う人たちとの関わり・つながりを大切にしていきたい。私が行う教育の先には、必ず子どもの笑顔・成長があると信じ、子どもにとってよりよい教育実践ができる教師を目指して、学び続けていく。

【参考文献】

- ・有田和正『子どもが生きる授業づくりの技術』(教育出版、1997)
- ・有田和正『「はてな？」で育つ子どもたち』(図書文化社、1989)
- ・有田和正『学習意欲はこう高める』(明治図書、1989)
- ・有田和正『社会科授業を活性化する技術』(明治図書、2004)
- ・行田稔彦「パネルシアター実践研究会の歩みー授業パネルシアターづくりに参加しませんか」(『生活教育』、生活ジャーナル、2014.10)
- ・田中耕治『時代を拓いた教師たち』(日本標準、2005)
- ・中妻雅彦「社会科教師の専門力量形成への一考察ー「対話性に着目してー」(『学藝社会 第21号』、東京学芸大学社会科教育学会、2005)